

人間の本性が見える場面

企業経営漫談士 岡野実空

日頃研究会で一緒している各社のミドルの方々から、このコラムの希望で意外に多かったのが、番外のこの項目。自主的に参加しているメンバーばかりなので、自分を律することに関心が高いか、あるいは日常的に、反面教師を身近に見る機会が多いのかも知れません。

今回は、これまでさまざまな角度から考えてきた「マネジメント」や「リーダーシップ」の影の部分ながら、光の実態がよくわかる、3つの典型的な場面を取り上げます。

場面1. 修羅場

とっさの場面を取る態度、思わず出る言葉は、その人間の本性が判る典型的な場面です。

かつて自社の連続不祥事でマスコミに追いかけられ、かっとなつて「俺は寝ていないんだぞ！」と凄んだ一流食品会社のトップがいました。記者の連中から「我々も寝ていません！」と反論されダンマリでは、全くお話になりません。(なりましたね)

かつて暴漢に襲われた板垣退助が、「板垣死すとも自由は死せず！」と言った話はあまりにも有名ですが、「痛いから医者を呼んでくれ」が真実。それでは記事にならないので、新聞記者が話をでっち上げたのが我が国のフェイクニュースの草分け。某総理大臣の尊敬するお祖父さんが暴漢に刃物で刺され、「あいつが犯人だ、早く捕まえろ！」と叫んで板垣の言動と対比され、ぼろくそに言われたのはちょっと気の毒でした。

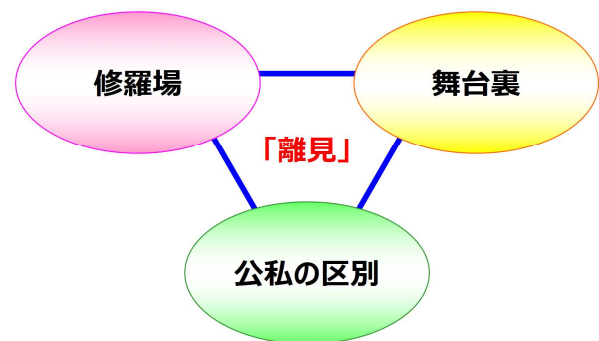
場面2. 裏舞台の言動

これに関する話題は、内外の政治家が連日提供してくれますが、表と裏の違いは経済人も同じで、ときどきマスコミを騒がせます。政治家に比べ露見する頻度が低いのは、「広告」掲載差止めという、新聞社やテレビ局が嫌がる武器を使って圧力をかけるからです。

例えば、昨年出版された『トヨタの野望』は、中部にある世界的自動車会社の内情を暴き、企業人必読本ですが、大手新聞社はどこも書評に載せません。主人公の一人である一族本流の経営者の生々しい言動が赤裸々に描かれ、ふつうの人は新聞やテレビの「よいしょ報道」の虚像との落差に茫然となります。

昔から、この類の政治屋、経営屋を「富士山のような人」と呼びます。その心は、遠くから見ると立派で感動するが、近づくとごつごつの岩やゴミだらけ。

E-14 人間の本性が見える場面



場面3. 公私の区別

これに関しては、相変わらず政治家連中が話題を提供し続けていますが、昔から今日に至るまで、経済界にも数えきれないほどのセコイ事例が存在します。もっとも皆さんの周囲にもごろごろ転がっていて、飲み屋の話題に事欠かないかも。またこの件は、とかくカネの話に集中しがちですが、ヒトや時間の公私混同は意外に見落とされています。皆さんの中にも、上司の引越や親の葬式に駆り出された方がいるのでは？これまた書き出したら切りがありません。

私が最も尊敬する経営者、廣田 正氏は、このことに関して、「他人を見て、いいなと思ったことは真似し、いやだなと感じたことはやらない」それだけのことと言いつちりました。お見事というしかありません。いずれにせよ、人の上に立つ可能性がある方々は、自らを律するため「鏡」を用意し、他人の目で自分を監視し、自制する習慣を若いときから身につける必要があります。

それにしても600年も前にこれを「離見」と称した世阿弥の偉大さ！いまなら確実、ノーベル賞！！

2019年8月17日(初出平成29年3月6日) 実空